

一生の宝となる同期のつながり



消防大学校長 牧 慎太郎

今年、消防大学は設立から60年を迎えました。全国の消防職員16万人、消防団員84万人あわせて100万人の最高研修機関として、昭和23年に創設された前身の消防講習所からの卒業生の累計は6万6千人を超えています。学生たちが寝食を共にする不二寮の定員は南・北寮あわせて224名、まさに同じ釜の飯を食った消大同期のつながりは一生の宝になるという声をよく耳にします。特に近年、甚大な被害をもたらす災害の多発に伴い、緊急消防援助隊の活躍が注目されますが、消大時代の教官や同期のつながりが、それぞれの消防本部から派遣された隊員による連携の円滑化に寄与していると高く評価されています。校長に就任して2ヶ月余りが経ち、改めて消防大学が全国の消防人材の交流拠点として大きな役割を果たしていることを実感しています。

さて、私の消防との関わりは昭和63年から平成元年にかけて消防庁総務課に勤務したことに始まります。昭和天皇の崩御に伴う大喪の礼にも全国の消防の代表者を引率して参列し、かつての古い消大の校舎で消防組織法の講義も担当しました。平成の時代が幕を閉じ、令和の時代を迎えて消防大学校長を拝命したことに感慨深いものがあります。

消防大学では、入校式のあと校長講話をさせていただきますが、そこで私が取り上げているテーマの一つが災害時のSNS活用です。現在、20代では98%がスマホ等でSNSを利用しており、マスクミを同じくなくても誰もが写真や動画付きで情報を発信できる時代になりました。私が兵庫県に勤務していた時に発生した兵庫県西部豪雨災害は死者・行方不明者20名に及ぶ大災害でしたが、SNSを通じて孤立集落の安否が確認され、また被災箇所の状況について写真や動画と位置情報付きで地域住民から続々と投稿があり、被災地の復旧にも役立ちました。また、私が熊本市副市長を退任して1年後に発生した熊本地震では、熊本市長がツイッターで水道の漏水箇所の住所情報と現場の写真をリプライで送るよう呼びかけたところ、約3千件もの情報が寄せられ、効果的な水道の復旧につながりました。そして、被災地の核心部から情報は出てこない～一定のエリアから情報が出てこないこと自体が重要な情報～という阪神淡路大震災の経験も踏まえ、SNSへの投稿をAIで分析して災害時対応に活かそうという新しい動きもあります。SNSの積極的な活用なども消防大学での学びに加えてはどうかと考えています。

また、この10年間で建物火災の件数は約3割減少していますが、一方で今年1月に秋田県能代市と東京都八王子市で3名が殉職するなど消防職員に対する実践的な教育訓練の必要性が増しており、実火災体験型訓練の体制強化も図っていきたいと考えています。これからも全国の消防職員・消防団員の期待に応えられる消防大学を目指して尽力してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。